

平成22年6月24日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520060

研究課題名（和文）日本における宋代風水思想の受容と展開に関する研究

研究課題名（英文） A Study of Acceptance and Development Song Dynasty' s Feng-shui Thought in Japan

研究代表者

鈴木 一馨（SUZUKI IKKEI）

財団法人東方研究会・研究員

研究者番号：50280657

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本における風水の受容と定着・展開に関する研究の一部として、中国宋代の風水思想－特に江西派風水思想－が平安中期より日本に伝来したこと、9世紀中期頃からの新規な四神相応説の伝来により寝殿造庭園が形成されたこと、12世紀終盤以降の禅宗と共に龍脈説が伝えられ禅宗寺院の空間条件・空間構成－特に伽藍軸の湾曲－を形成したことなどを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research which is the part of the research about acceptance and development of Feng-shui(風水) in Japan showed three respects. First, the Feng-shui thought of the Song dynasty, especially what Jangxi denomination hold, was introduced into Japan in the mid Heian period. Second, shishin-souou(四神相応) thinking which has been newly made since the mid of the ninth century in China formed the model of Sinden-zukuri(寝殿造り) in Japan. Third, Zen thought which had been introduced since the end of the twelfth century brought the ryumyaku(龍脈) thought to Japan and it constituted Zen temple's unique space in the points of the formations and conditions which especially means the curve line of center buildings of Zen temple.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,500,000	750,000	4,250,000

研究分野：宗教学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：風水 江西派 中世 日中交流 禅宗 庭園 空間構造

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の全体構想は、日本における風水の受容と定着・展開に関する全体像を把握することにある。これは、研究代表者が抱いて

いるさらに上位の研究構想である、日本における中国民間思想にもとづく宗教的諸思想・技術の受容と展開に関する研究の一端をなすものであり、この上位構想の中でもう一

方の主軸をなしている陰陽道の研究と車の両輪をなすものである。陰陽道の研究は、ここ 20 年ばかりの間に宗教学・歴史学を中心として、日本における基礎的思想の受容と定着・変質、そして陰陽道の成立と歴史的展開など全体像がある程度明らかになりつつある。

(2) 現在、日本での風水の研究は文化人類学・民族学・民俗学・中国文化論・宗教学・歴史地理学・文化地理学・考古学・建築学・都市工学・環境工学など諸方面からのアプローチがある。しかしながら、その主たる対象地域は中国・韓国・沖縄が中心となっており、日本における受容と定着・展開に関する研究はごく少数で、風水の積極的な研究対象となっているとは言い難い。ただし、古代の都城制に関連した四神相応に関する議論や家相に関する研究がそれなりに蓄積されており、日本風水史の本格的な研究はようやく緒に就いた状況である。

(3) しかしながら、その研究は中国における風水思想・風水術の変遷を踏まえたものではなく、また日中交流の視点を欠いたものでもある。そこで語られる「日本の風水」は、古代に伝えられたものが変化せずに（あるいは日本独自に変化し）展開したということであたかも前提としているが如くであり、きわめて不自然と言わざるを得ない。このような状況下、一部例外を除き、研究者が世上に伝えられている風水の言説（特に四神相応説や龍脈説）を、なんの検証もなく安易に流用し「日本の風水像」を提示することも多々見られる。研究者が安易に「風水」を言うことの危険性は、全く歴史的背景を踏まえずに「風水」という言葉やその現象が独り歩きしているという世上の状況に、何の学問的検証も踏まえぬまま学問的保証を与えてしまうことにつながっており、これに基く「まちづくり」「町おこし」などもしばしば目にするところである。

これらのことは、日本の宗教あるいは生活空間の構造またその意味を理解する上で大きな問題があると考え、同時に学問的言説の信用にもつながる重要な問題が内包されていると考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、日本における風水の受容と定着・展開に関する全体像を把握する日本風水史研究の一端として、中国において風水思想・技術が一大変容を遂げた 9 世紀末期から 10 世紀中期の影響を、日本が人的・交通路としてどのルートで受容し、日本の内部で誰がどのように現象化したのかを明らかにしようとしたところにある。これは、その上位の研究構想である、日本における中国民間思想にもとづく宗教的諸思想・技術の受

容と展開に関する研究の一端をなすものである。

(2) 直接には、以下の 4 点の解明を通じて、これらを通じて、中世日本において宋代風水の様式として江西派風水の思想と方法が伝来していたことを明らかにすることを目的とした。

①. 日宋交流の大きな担い手である禅僧と商人による日宋交流の実状を追うことによって、人的・交通路としての受容ルートの解明。これまでの日本での風水の研究は「風水は中国系の文化である」という点のみで理解されてきたが、中国の風水に歴史的変化があったことは明らかにされつつある。その中国での変化が地域性を帯びたものであったことは、少なくとも「江西派」「福建派」という地名を冠して称される二系統が成立したことによりほぼ間違いないものと見られ、このような中国での風水思想・術の地域差を踏まえて、日本の風水の受容を明らかにする必要があると考えたものである。

②. 入宋僧・渡来僧の開創にかかるものを中心とした禅宗寺院の伽藍空間の分析。禅宗寺院の伽藍空間構成は、従来「中心伽藍が一直線」だとされてきた。しかしながら、これまで研究代表者が準備調査を行ってきた日本や中国の禅宗寺院においては、むしろ中心伽藍が一直線になっていないものの方が多く、これは禅宗が中国に伝来してからほぼその中心的な展開地域であった江西の地において、伽藍の選地、あるいは空間構成に江西派の風水思想が影響し、特にその中でも龍脈説の影響により一直線化しなかったのではないかと推定されることから、その客観的証明をすべくパターン化を図ることが必要と考えたものである。

③. 日本の禅宗寺院を開創した入宋僧・渡来僧の著作や僧伝、あるいは寺誌などからの風水用語の検出。中国の僧伝あるいは寺誌などでは、伽藍の選地や内部空間の説明において風水による説明をされるものが時折見られる。これはその禅僧の能力や寺院の性格、あるいは靈験を強調するために記されたものと見られるが、日本における禅僧の僧伝の記述法が中国の僧伝に倣ったものであることから、日本においても同様の例があるのではないかと考えたものである。

④. 商人や禅僧の手を経て流入したと思われる邸宅空間（特に庭園構成）の分析を通しての江西派風水の特徴の検出。従来、寝殿造住宅と寝殿造庭園が一体のものとして考えられていたのに対して、寝殿造庭園はその指南書である『作庭記』の記述を見る限りにおいて江西派風水の用語を使用していることから、少なくともその成立は江西派風水の影響を受けて 10 世紀初頭頃に形成されたものと推定される。従って、それ以降の寝殿造庭園

の流れを汲む庭園、あるいは江西派風水の空間構成を学んだと考えられる禅僧の作庭などの例を収集し、分析することによって日本での江西派風水の思想がどのように具現化されたのかを知ることができるのではないかと考えた。

3. 研究の方法

(1) 本研究の方法の第1は日宋間の人的交流の検証である。具体的には、禅僧の著述から風水関係用語を検出すること、また禅僧をはじめ日宋間の往来をした天台僧・真言僧・真言律僧の僧伝、古記録・古文書類から貿易商の記述を検出し、その分析によりその往来が中国のどこと日本のどこを結ぶものであったのかを明らかにすること、また中国僧については僧伝或は寺誌などから出生地や遍歴の地を求めた。これは、中世日本がどの地域の風水思想の影響を受ける可能性があったのかということの検出となった。

(2) 第2は風水文献の分析である。直接には江西派の初期の文献と目される『管氏地理指蒙』を中心に、実際にどのような傾向の思想を宋代風水が持っていたのかを分析し、実際の選地、あるいは形成された空間への具象化の有無の基礎データを作ることになった。

(3) 第3は実地検分である。本研究では、江西派風水の展開地域と目される現在の江西・湖北・安徽・湖南・江蘇・浙江など長江中流域ならびにその支流、また日本の中世創建の禅宗寺院ならびに禅僧の関わった庭園を実地に検分し、江西派風水思想の影響を受けた空間の状況確認と、(2)によって分析された江西派風水の思想がどのように具象化されているのかについて確認をとった。

4. 研究成果

(1) 中国宋代の風水思想—特に江西派風水思想—が平安中期より日本に伝来したこと。まず、中国風水史を明らかにすると、9から10世紀の風水思想・技術系統に江西派・福建派の二系統が発生し、そのうち江西派風水の展開地域が、現在の江西・湖北・安徽・湖南・江蘇・浙江など長江中流域ならびにその支流に互ったこと。これは6世紀以来、現在の江西省を中心に展開した南宗禅の拵がり軌を一にしたものと考えられ、また同時に長江水系の水運によってその思想・情報が拵がったことを意味するとも考えられる。一方、日中交流路は9世紀以降、唐および宋による市舶司の設置によって市舶司の置かれた明州一帯に限定され、このことから9世紀以降の中国情報、特に習俗などに関するものについては、唐都の長安や宋都の開封のものではなく、浙江付近のものが伝えられたとみられること。つまり、日本での宮都造営期の風水思想や術が長安などのものであったのに対

して、地方化されたものが伝えられた可能性があると判明した。

(2) 9世紀中期頃からの新規な四神相応説の伝来により寝殿造庭園が形成されたこと。これまで数多く行なわれてきた平城京・平安京あるいは長岡京の発掘報告等からすると、平城京・長岡京と9世紀中期までの平安京の貴顕の邸宅は建物が相互に独立しており、9世紀中期以降に寝殿造住宅が形成されていることが判る。この寝殿造住宅は、藤原氏が天皇の外祖父として摂政あるいは内覧(関白)を務めるようになってから、本来内裏で行なわれるべき諸儀礼を私邸で行なうべく形成されたものと考えられ、従って内裏の構造をそのまま縮小したようなものとなった。この場合、前庭は儀礼の場として空間が確保されていなければならない、装飾性を省いたものであったと見做される。これに対して寝殿造庭園は10世紀後期より寝殿造住宅の庭園として形成されたものと考えられ、その作庭法を記した『作庭記』には、東方の水流を青龍、南方の池を朱雀、西方の通路を白虎、北方の築山を玄武とする四神相応説による作庭法が記されており、またその水流の形が吉地・凶地を形成するなど、江西派風水の特徴を含んでいるところから、寝殿造庭園は9世紀以降の日中交流路の関係から浙江付近で行なわれていた江西派風水の方法が元になって形成されたものと考えられることが判明した。

(3) 12世紀終盤以降に禅宗と共に龍脈説が伝えられ禅宗寺院の空間条件・空間構成—特に伽藍軸の湾曲—を形成したこと。従来の禅宗寺院伽藍空間の構造については、「五山十刹図」「建長寺伽藍指図」などの絵図資料がもとになって、中心伽藍が一直線になり、周辺伽藍がその両側に対象に並ぶものと理解されてきた。しかし実地に検証してみると、江戸期における伽藍の再構成はあるものの建長寺では中心伽藍が一直線に並ぶということは地形上不可能であり、また建仁寺・聖福寺をはじめいわゆる七堂伽藍をかつて備えていた大寺の調査をしても、中心伽藍が一直線であったものは富山県高岡市の瑞龍寺を顕著な例とするほか日本では見当たらず、その瑞龍寺も17世紀の創建であることを考えるとむしろ理念的に一直線の形成がされたと理解される。中国側の文献の例などからすると、寺院の中心伽藍は龍脈に乗っているということになっており、京都府宇治市の萬福寺では風水思想による龍脈の理念を説明に使わないまでも、その石条が龍を意味しているということを書いており、やはり龍脈に中心伽藍が乗っているということを匂わせている。これらのことから、日本の禅宗寺院の空間条件・空間構成に龍脈説が伴っていたことは十分に考えられる。また、その龍脈説

は、禅宗寺院との関係以外のものを現在見出すことはできず、俗に言われる都市空間への龍脈説の影響については、熟考する必要があることも判った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 鈴木一馨、中世禅宗寺院の伽藍空間における宋代風水術の影響について、宗教研究、363、432～433、2010、査読無
- ② 鈴木一馨、中世日本における禅宗寺院の空間構成と江西派風水、歴史地理学、247、62、2009、査読無
- ③ 鈴木一馨、日本古代・中世期の風水術における四神相応について、宗教研究、359、383～384、2009、査読無
- ④ 鈴木一馨、日本における江西派風水の受容について、歴史地理学、241、87、2008、査読無
- ⑤ 鈴木一馨、日本における江西派風水の展開について、宗教研究、355、435～436、2008、査読無
- ⑥ 鈴木一馨、日本における江西派風水の受容について、宗教研究、351、366～367、2007、査読無

[学会発表] (計7件)

- ① 鈴木一馨、中世日本における禅宗寺院の空間構成と江西派風水、歴史地理学会第52回大会、2009年9月19日、神戸大学
- ② 鈴木一馨、中世禅宗寺院の伽藍空間における宋代風水術の影響について、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月12日、京都大学
- ③ 鈴木一馨、日本古代・中世期の風水術における四神相応について、日本宗教学会第67回学術大会、2008年9月14日、筑波大学
- ④ 鈴木一馨、日本古代の都市・住宅と風水、明治大学古代学研究所シンポジウム「都城・住宅の風水思想－東アジアの陽宅風水研究－」、2008年6月15日、明治大学
- ⑤ 鈴木一馨、日本における江西派風水の受容について、第51回歴史地理学会大会、2008年5月18日、宮城大学
- ⑥ 鈴木一馨、日本における江西派風水の展開について、日本宗教学会第66回学術大会、2007年9月16日、立正大学
- ⑦ 鈴木一馨、日本古代における風水の転換、明治大学古代学研究所シンポジウム「東アジアの風水思想」、2007年10月21日、

明治大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木一馨 (SUZUKI IKKEI)

財団法人東方研究会・研究員

研究者番号：50280657

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：